

ハタハタ漁復活に弾み

鮎ヶ沢・丸重組

産卵用藻場を造成

県内初の試みで成果

冬の風物詩として知られながら2年連続で漁獲量が低迷している西海岸のハタハタ漁を、かつての姿に復活させようという取り組みが成果を見せ始めている。県が鮎ヶ沢町の海底に設置した潜堤ブロックに、同町の丸重組（富田名重社長）が産卵場所となる海藻のホンタワラを生育させるもので、この手法による藻場造成は県内初の試み。今シーズンも卵を産み付ける雌の姿が確認されており、循環型漁業の推進に弾みを付けるものとして注目されそうだ。（柳野耕）

富田社長は県漁港連 境を創える会 の会員 ー 県内海域の日本海、設業協会の「県藻場環 境として、2005年か ー 津軽海峡、陸奥湾、太



潜堤ブロックに覆い茂ったホンタワラにプリコが付き、受精のためにハタハタの雄（中央）がその回りを泳いでいる＝2011年12月22日撮影、丸重組提供

平洋の藻場の対策を考へてきた。同町はホンタワラが生育しない砂浜域に当たり、ハタハタの産卵場所となる藻場が皆無だったことから、県産業技術センター水産総合研究所、日本コーケンなどの協力を得て、藻場環境整備による魚資源回復を検

討してきた。

潜堤ブロックの藻場は日本海拠点館裏手の海中に整備。水深4.5の砂地に重さ数百kgの岩石を約1.5mの幅

子をつくり付けるなどさまざま工夫を凝らした結果、1年後にはホンタワラが潜堤ブロックを覆うように茂り始めた。これに伴って一昨年の冬には潜堤ブロックのホンタワラにハタハタが群がり、海上一面が白くなったという。富田社長は「今シーズンもたくさんのハタハタの雌が潜堤ブロックのホンタワラに卵を産み付けるのを確認した。地元資源回復を図ることは、地元企業として当然。考えてみれば海浜地区の藻場再生は試行錯誤の連続だった。工事を完了まで気を抜かずやりたい」と語った。

（陸奥新報社二〇一二年一月二十四日掲載）